

今週の話題：

<ポリオ根絶への進展 2001年1月～2002年10月 エチオピア、ソマリア、スーダン>

1988年の世界保健会議でのポリオ根絶に関する決議以来、全世界のポリオ発生率は99%以上減少し、全世界人口の約55%を占めるWHOの3地区(アメリカ、ヨーロッパ、西太平洋)ではポリオ根絶が証明された。ポリオ根絶活動の結果、アフリカの角(HOA)3ヶ国(エチオピア、ソマリア、スーダン)では伝播阻止に近づいている。この報告はこれら3ヶ国におけるポリオ根絶活動の総括である。

* 定期的な予防接種：2001年エチオピアでは1歳未満児の50%、ソマリアでは33%、スーダンでは71%(南部闘争地区は除く、全国平均では47%)が3回の経口ポリオワクチン(OPV3)投与を受けたと算定されている。

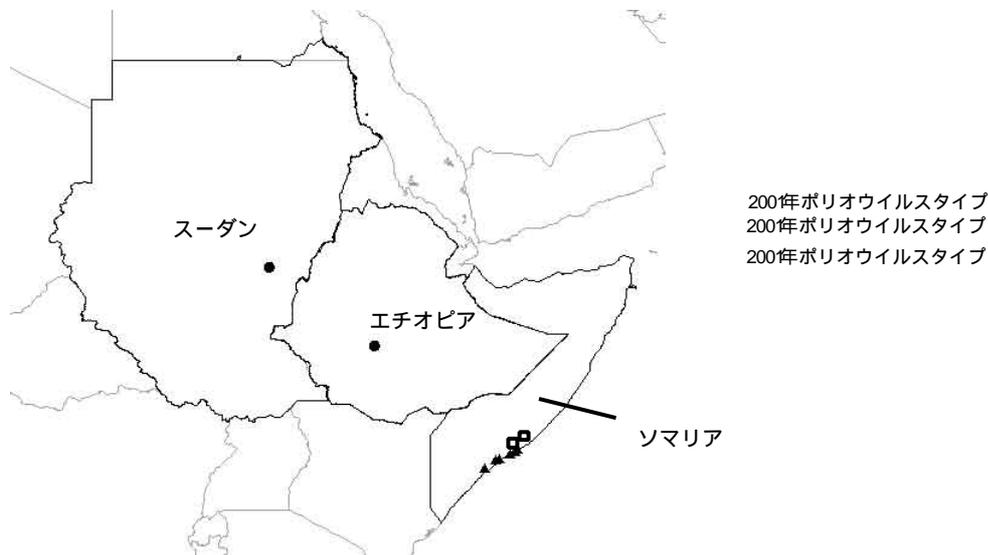
* 補足的な予防接種活動(SIAs)：SIAsは全国ワクチン接種日(NIDs)から始まり、1999年のソマリアとスーダン、2000年のエチオピアでの戸別訪問予防接種で強化された。2001年と2002年には、5歳未満児を対象にエチオピアでは1,370万人、ソマリアでは130万人、スーダンでは700万人に年最低2度のNIDsが実施された。NIDsに加えて特に危険地域を対象に地域別ワクチン接種日(SNIDs)を設け、350万人の子どもにワクチンが接種された。

* 急性弛緩性麻痺(AFP)の監視：2001年以来エチオピア、ソマリア、スーダンで非ポリオAFP率がWHO基準を超過している(表1)。3ヶ国のAFP監視はSIAs兼任のポリオ根絶職員により行なわれ、エチオピアでは19名、ソマリアでは164名、スーダンでは北中部44名、南部274名が配置され、他の伝染性疾患の警戒ネットワークにも参加している。表1：AFP症例数、非ポリオAFP率、ポリオ確定症例数 - エチオピア、ソマリア、スーダン、2001年1月 - 2002年10月 (WER参照)

* 野生型ポリオウイルス：エチオピアでは155症例(3例でウイルス確認)、スーダンでは79症例(4種のウイルス確認)、ソマリアでは96症例(46例でウイルス確認、うち42症例が首都Mogadishuで発症)が報告された。最後に野生ポリオウイルス症例(タイプ)が報告されたのは、エチオピア(2001年1月)とスーダン(2001年4月)であった(地図1)。2001年、ソマリアはMogadishu地区において7症例を報告した。2002年、3型野生ポリオウイルス症例がソマリア(Mogadishu地区)で報告された。

* 編集ノート：2001年1月以来、3ヶ国ではポリオ根絶が大きく進展している。各々の国の保健関係者の努力と世界的な支援によって、エチオピア、スーダンでは1年以上ポリオ発生がなく、ソマリアでは伝播がMogadishu地区に限られている。HOA諸国、特にソマリア、スーダンにおける野生型ポリオウイルスの伝播阻止は交通の便の悪い地域や戦闘が続いている地域においても根絶活動が効果をあげたことを示している。ポリオ根絶計画ではSIAsとAFP監視が重要視されており、エチオピアやスーダンなどポリオ根絶国ではウイルス伝播阻止を確実にするために高いレベルの予防接種活動と監視を維持すべきである。ソマリアなどでは予防接種活動もAFP監視も不十分である。HOA諸国の紛争の影響下にある地域において、小児にアクセスするのは困難であるが、ソマリアのMogadishu地区での野生ポリオウイルス伝播阻止は不可欠であり、WHOとUNICEFによる協力の継続が必要である。困難な状況下でのポリオ根絶活動には多大な経費を要し、2003年HOA諸国での目標達成のためには5,000万USドル投下できるかが鍵である。今後ポリオ根絶に必要な活動が継続でき闘争地域の全て小児にワクチン接種が実施されれば野生型ポリオウイルス伝播が阻止される日は近いと思われる。

地図1：野生ポリオウイルス分離によるポリオ確定症例数 - エチオピア、ソマリア、スーダン、2001年1月 2002年10月



< 第 3 回予防接種安全策運営委員会 >

第 3 回予防接種安全策運営委員会は 2002 年 6 月に開かれ、2000 年に開催された会議からの進展と問題点が討議された。次の進展事項が強調された。

- ・ワクチン基金による注射器安全化事業の支援
- ・ワクチン予防接種世界同盟(GAVI)による注射器安全計画への技術支援
- ・ワクチンと廃棄物処理の安全に向けての疾病(はしかと破傷風)抑制キャンペーンの利用
- ・UNICEF 中期戦略計画における予防接種安全策の採択・予防接種安全策の重要性認識の必要性
- ・ポリオ職員の安全問題に対する計画、実行、監視の訓練機会の提供
- ・本改訂に伴う安全問題強調の機会提供
- ・安全問題改善のために報告書「Quality of care:patient safety」(A55/13)の利用の是認。

事務局は委員会に新しい戦略である予防接種安全策の優先事業 2002～2005 年を提案した。安全で効率的なワクチン管理と処分について、委員会では注射器の再利用から自動破棄(AD)注射器への転換を勧めており、職員の再訓練と監督、周囲に対し実状に応じた安全プロモーションを行なうよう述べている。また焼却装置の使用が広まっており、注射器の廃棄と費用効果、環境問題について今後研究を行なう必要がある。委員会はワクチンの安全が評価され、各国が必要なワクチン量を確保し、国内調整局(NRA)により品質管理され WHO は情報交換と機能改善のため NRA を補助する必要がある、また免疫による不利事項(AEFD)監視システムのため免疫計画には政治力も必要としている。研究ではワクチン配達方法が探索されている。例えばワクチンの熱安定と針なしワクチンが考えられている。世界諮問委員会の次の会議ではチオマ・サル(Choma-Sal)の安全性などを議題とする。委員会では 2003 年には予防接種安全計画の基準を作成することにしている。

* GAVI とワクチン基金:運営委員会では GAVI の注射器安全化計画の重要性を鑑み以下を勧告した。

- ・国を技術援助し、安全策の簡易化し、促進する
- ・注射器安全策を援助するために GAVI の基準拡大
- ・注射器処理に際してダイオキシンや他の有害物質についての GAVI の安全な焼却管理技術を推進
- ・AD 注射器に移行するまで 3～5 年の援助延長。

* NRA の強化:委員会設立以来の進展は能力開発と NRAs の評価によりなされてきた。

- ・GAVI 基金被援助国は NRAs 強化によって資金運用する。
- ・WHO は AEFI の研究や一定の活動ができるよう NRAs を強化する。
- ・保健省などは NRAs と免疫計画に密接に協力する。

* 計画の問題:委員会は WHO に対し以下を勧告した。

- ・ポリオ根絶対応のインフラ利用法の探求。
- ・他の疾病(はしか、破傷風)抑制イニシアチブとのさらなる免疫安全策の統合。
- ・スタッフの安全に関する訓練を保証。
- ・現在最良の廃棄物処理焼却装置の承認。
- ・費用効率や環境に配慮した注射器処理代替法に関する研究の続行。

* 情報伝達と主張:情報伝達戦略として次のことを推薦した。

- ・個人的恩恵を強調し保健職員や民間人への安全策を促進。
- ・専門知識を集約し情報伝達の強化と唱導活動の推進
- ・委員会を調整する機関の能力を強化。
- ・WHO や国内外の会議で安全策を強調。
- ・患者の安全策への問題意識を上昇。

< 全世界的ポリオ根絶の開始:流行国数の低下 >

2001 年に 1,000 万人のボランティアが野生型ポリオウイルスの世界的伝播を防ぐ最終策として 5 億 7,500 万人の小児に免疫活動をした。2002 年には全 3 種の野生型ポリオウイルス伝播が阻止できる。WHO 3 地区では野生型ポリオウイルスによる本来のポリオの発生はないことが確認された。野生型ポリオウイルスは 2002 年 10 月にわずか 6 ヶ国でのみ伝播が報告された。ポリオ症例の 90%はインド、ナイジェリア、パキスタンで、タイプ 1 の野生ポリオウイルスの報告は 1999 年 10 月以来ない。野生型ポリオウイルスの伝播阻止は、予防接種や政治的財政的援助の保証にかかっている。研究所からの野生型ポリオウイルスが流出する可能性を最小限にとどめ、経口ポリオワクチンによる予防接種を中止できるかを決定しようという試みが進行中である。

流行ニュースの続報:

< インフルエンザ >

アルゼンチン(2002.11.2) インフルエンザ流行は散発的であり、A 型と B 型が検出されている。

フィンランド(2002.11.11) インフルエンザ B/Hong Kong/330/01 様ウイルスが 11 月 2 週目に女兒 1 名より分離された。インフルエンザ流行は今季最初より報告されていない。

フランス(2002.11.11)¹ インフルエンザ B 型ウイルスが 11 月 1 週目に 51 名から検出された。

香港(2002.11.16)¹ インフルエンザ流行は大変低い状態であり、A 型と B 型が分離された。

ポルトガル(2002.11.22)² インフルエンザ流行は低レベルで、A(H3N2)型と B 型は散発的であった。

ロシア(2002.11.16) A 型ウイルスが散発的に抗原より検出され、血清学的検査より A(H3N2)型、A(H1N1)型、B 型が検出された。

スペイン(2002.11.22)² 今年初の B 型ウイルスが 11 月 2、3 週目に女兒 2 名より分離された。

参照: ¹No.44,2002,p.371, ²No.43,2002,p.364

(幸田陽子、関啓子、高田哲)